

4. 事業者・団体へのインタビュー

ここまで、B R Mについての説明やB R Mを活用できなかった事故事例を紹介してきましたが、B R M訓練を行っている企業やB R M研修を実施している団体からもB R M訓練の効用などについてお話を伺いましたので、ご紹介します。

① N X 海運株式会社

Q 貴社では、いつからどのような内容のB R M訓練を開始されたのですか。

A 2004年から海技大学が主催している2日間のB R M訓練に参加して、B R Mコンセプトの学習、過去の事故事例研究、航海計画作成、操船シミュレーター訓練を行っています。

シミュレーター訓練では、船長・航海士・甲板手の役割を1回ずつ担当して、合計3回のシミュレーター訓練を行います。

Q 何年目になったら、航海士になったらなど、受講対象者の選定基準はあるのですか。

A 近年は、若手の三等航海士及び入社3年目以降の甲板手から選出しています。

Q 職員にB R M訓練を受講させるにあたり、どのような点に気を付けていますか。

A ・受講前にB R M訓練の趣旨を理解して参加すること
・操船技術向上を目的としたものではないこと
・正しいとされる手法と自分のブリッジワークとのズレを意識すること
を伝えています。

Q 訓練修了者からは、どのような点が特に勉強になったとの声がありましたか。

A ・事故に至るメカニズム（脳の構造とそれに起因する人体構造上の限界）
・船橋内におけるコミュニケーションの重要性
・緊急時における対応と現状における自分の処理能力の理解
・自分の航海当直の実力を客観視することができた
・操船者が他の見張員に自分の操船意図を伝えることの重要性
・他の役割の人がどのような意図を持っているかが分かる良い機会になった
などの報告を受けています。

Q 下位者から疑義等を申し出しやすくなるような取組や工夫をされていますか。

A 船長・一等航海士を中心に、日頃からの声掛けなどを通して、話しやすい雰囲気作りを心掛けています。

Q B R M訓練の受講が役に立ったグッドプラクティス事例があれば教えてください。

A B R M訓練修了者と乗船していても、修了者は報告の仕方などが受講前と比べて的確になっていると感じます。

②株式会社商船三井さんふらわあ

Q 貴社では、どのような内容のB R M訓練を開始されたのですか。

A グループ会社である商船三井マリテックス株式会社のシミュレーターを利用して

- ・若手三等航海士向けの航海当直に関する内容
- ・中堅以降を対象とした（船長・航海士・甲板手・オブザーバー）の4名で行う、入出港や緊急事態対応を含めた内容

の訓練を実施しています。

Q 何年目になったら、航海士になったらなど、受講対象者の選定基準はあるのですか。

A

- ・三等航海士の研修は、年2回、新人航海士が入社後の早い段階で受講できるよう選任
- ・中堅以降対象の研修では、年1回、船長昇進者や若手甲板手を優先的に選任

して、継続的に実施することで各乗組員がまんべんなく受講できるように努めています。

Q 職員にB R M訓練を受講させるにあたり、どのような点を意識させていますか。

A 若手三等航海士には

- ・相手に伝わる報告
- ・船長の意図を考慮する

ことを身につけて欲しいと伝えています。

Q 訓練修了者からは、どのような点が特に勉強になったとの声がありましたか。

A

- ・事前に打合せをしてシミュレーションにあたるため、船長がどこを見て何を基準に操船しているかを理解できた。
- ・緊急事態のシミュレーションも行うので、通常業務では使用することのないメーデーなどを使ったV H F呼出し通信手段がいかに有効か（通報が周囲に伝わりやすくなるか）を再認識できた。

などの報告を受けています。

Q 下位者から疑義等を申し出しやすくなるような取組や工夫をされていますか。

A 緊張感は保ちつつも発言しづらい雰囲気にならないよう、報告内容を受け入れるように意識し、必要な情報が足りていなければ確認して報告を促す形で情報共有を行っています。

Q B R M訓練の受講が役に立ったグッドプラクティス事例があれば教えてください。

A

- ・当直時の位置入れの際にも、必ず相方の甲板手に「ポジションを入れるので、見張りをお願いします。」の一言を言うようになった。
- ・入出港時の船長の意図を意識するようになったので、船長ごとのチェックポイントを意識して報告を行ったり、船長昇橋前のレーダー設定を意識するようになった。

と感じています。

③独立行政法人海技教育機構海技大学校

Q B R M及びE R M*1の訓練はいつから開始されたのですか。

A B R Mは2001年から、E R Mは2006年にE T M訓練として始まり、2013年からE R M訓練を実施しています。

Q 年間何回ぐらい実施しているのですか。

A 内航船員対象は月1～2回程度、外航船員対象は月1回程度のペースで実施しています。

Q 受講者はどの業界の方が多いのですか。

A 一番多いのはタンカーで、次に貨物船に乗船されている方が多い傾向にあります。

Q 会社の方針によって、船長が受講する会社や三等航海士になったら受講する会社があると思いますが、貴校でB R M訓練を受けてほしい職員の階級や役職はありますか。

A 職員だけでなく部員で受けている方もいて、階級や役職にこだわらず船舶運航に携わる皆様に受けてほしいと考えています。

Q 研修参加者の業種や新人かベテランかによって指導する点に違いはありますか。

A 大枠としては同じ内容ですが、内航の場合は日本国内の海域のみでシミュレーター訓練をするところ、外航の場合は国内外の両方の海域を使用したり、船機長の方がいれば入出港操船を入れたり、受講者チームの構成に合わせて内容を組んでいます。

Q 指導を行う際に気を付けているポイントを教えてください。

A 情報の共有化、クロスチェック、役割分担の明確化、適切なリーダーシップの4点を重視しています。

Q B R Mというとコミュニケーションの問題と思われがちですが、色々な要素があり、受講者に何を意識して参加するよう伝えていますか。

A ・情報の共有化を意識してほしい。
・B R M訓練は、操船の上達が目的ではなく、色々なシチュエーションがある中で、気付いたことを躊躇せずに伝えることを重点としてほしい。
・訓練の場だけでなく、学んだ事を持ち帰り継続してほしい。
といった事を伝えています。

Q 今後のB R Mの一層の活用に向けて一言お願いします。

A 当校ではS T C W条約の改正前からB R M訓練を実施しており、事故を未然に防止する鍵は、B R M訓練の実践と考えています。B R M訓練の場だけで終わらせるのではなく、継続して訓練を受けることによって船舶の安全運航に結び付くと考えています。

*1 「E R M／E T M」とは、「B R M／B T M」の考え方を機関室にも取り入れたもの。